高校生活

ウルキアガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高校生活

【Ｎコード】
Ｎ０５４０Ｔ

【作者名】
ウルキアガ

【あらすじ】
自分の高校生活はとても面白いものだったし充実したものだったが同時に数多くのトラウマを残していったんだ。――――だからこれは僕の忘れてしまいたい思い出であり、決して失うことのない物語

ぷろろーぐ（前書き）

初投稿です。
実は半分自分が経験したものだったりしてw

ぷろろーぐ

ぷろろーぐ

「やぁ久しぶりだね――――。君が僕を呼び出すなんて思ってもいなかったよ」

都内でよく見かけるチェーン店の一つで彼女は僕を呼び出してきた。高校卒業から3年近く連絡を取り合っていなかったのだが、まさか彼女のほうから会いにきてくれるなんて思ってもいなかった。

「あら、私が貴方にメールするのは初めてではないはずよ？」

3年前はよくしていたじゃない？と彼女は付けくわえまるで映画の中のヒロインみたいに長い髪を片手で抑えながらゆっくりと艶のある唇でコーヒーを一口飲む。

「そうだね。そう考えたら、この3年間何も連絡を取らなかったほうがおかしかったのかな？――――まぁそれはどうでもいいことだし、今更どうしようもない事だけどね」

むしろ僕は彼女とこうやって会うこと、まして、連絡なんて取るつもりもなかったのだが、まさか。そう本当にまさか彼女のほうからなんて。

「で何のようだい？僕と会って話がしたいなんて――――。裏がないかと疑ってしまうよw」

僕としては早くことを済ませて明日からの休日に向けて早く睡眠をとりたいところなんだけどね？といいたくなったがそれは久しぶりに会った友人との会話にはただの蛇足しかなく。無意味でしかないと理解している。

「ふふ。そうね――――――ただ昔話でもって思ってきたの？それじゃダメかしら？」

どこかしら演技じみたしぐさで彼女は微笑みそして、得意でしょ？面白おかしく話すのは。っとつなげた。

昔話。それは僕にとっては高校時代の数々のトラウマ的な実体験であり、御伽噺とは遠くかけ離れた。あまりにも理不尽でどこにでもある話だった。

「わかったよ。そんなに聞きたいなら僕と一緒に後悔していこう。これからも、一生に――ね。」

ぷろろーぐ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
更新が遅いかもしれませんががんばります

一話

それは高校2年になりたてのことだった。
ちょうど両親が離婚して、自分が祖父母の家に預けられた頃のことだ。その頃の自分といえばなんて言えばいいだろう。そうだな知り合いが言うには死んだ魚の目をした。ただのメガネな少年だって所かな？運動神経が言い訳でもなく、かと言って頭がいいわけでもない成績もど真ん中なごく普通のオタクな変人だってことかな？当時はまだ自分を普通な一般的な考えをした人間だって思っていたが、その頃からよく他人には変だって言われていたのをムキになって否定していた頃だ。
高校でも興味がないものにはあまりやる気を出さないで生きていた。一学期の中盤だったけ？ちょっと面白い話をオタク友達の田端美月（たばた みずき）ちゃんから聞いたのだった。
「ね。ゆっきー？知ってるかな？演劇部の噂を？」
おっと大事なこを言い忘れていたが語り部である僕の名前は坂口（さかぐ）有希（ちゆき）です。であだ名はグッチーとかゆっきーでよばれています。以後お見知りおきを
「何？」
読みかけのライトノベルにしおりを挟みながら本格的に話を聞く体制をとり、美月ちゃんのほうを向いた。といっても僕の横が彼女の席であり、2年生の間彼女がずっと僕の隣の席という面白い縁だったけ？まぁどうでもいいけど。
美月ちゃんは自分より少し背の低い女の子でおかっぱ頭の和服を着たらきっと似合うだろうなって言う子だった。笑顔も可愛いし僕としては結構気に入っていた。彼女の両腕の傷なんて僕には些細なことだったしね。
「うちの学校の演劇ぶってさ。今3人だけどねそのうちの二人がね

とてもおもしろいの」
「どのように？」
美月ちゃんが僕に持ってきてくれる面白い話は今まで外れたことがなく。僕はとても期待していた。そして今回も彼女は僕の期待を裏切らないでくれた。
「ゆっきーはさ――――知ってるかな？邪気眼系中二病って？」
邪気眼系中二病――――確かにその言葉は僕も知っていた。某有名な大型掲示板でよくたっているスレを笑いながら見ていた。が実際にそのような人たちを見たことはなく。自分の近くにいるなんて思ってもいなかった。
「知っていますよ」
「なら説明とか要らないかな？で実際にその二人がねそれなの。今女子の間で結構有名でね。まぁ男子まで話はいってないみたいだけどね。色々とすごいわけなの」
どのように？と僕は相打ちを入れ美月ちゃんの話を促した。
「で高山礼美（たかやまれいみ）ちゃんと高津明日香（こうづあすか）ちゃんていう子なんだけどさ、幽霊見れたりお祓いできたりするんだって」
「彼女達は神社やそのような家系の子なの？」
美月ちゃんは笑いながら「違う違うwただの一般家庭だよ？まぁ本人達が言うにはいろいろと虐待とかwうけたり、両親がちょっと可笑しいみたいだけどねw本当かどうかわからないけどねwwつか嘘だよきっとw」
幽霊が見れる。それだけで僕の好奇心は十分に満たされていたし、普通とは違う何かに惹かれるのって人間誰もが持つものだと思う。もし、彼女達が本当に幽霊が見れているのであればなんて考えると僕の胸はときめいたし、アニメや小説みたいな展開になるなら絶対に近くで見てみたいと思ったんだ。
当時の僕はきっと退屈で青春という甘い時間を持て余していたんだと今になって思うんだ。だからきっとこんなことを言ってしまったんだと思う。

「なら僕が確かめてあげるよ」
言うと思ったよ。———美月ちゃんはきっと僕がどう動くかわかってて話したんだなっと美月ちゃんの言葉を聞いて確信したしはめられたかな？と思った。でもそれでもいいと思えたしそれ以上に楽しそうだった。当然僕がねw
「ならさ私も手伝うよ。ゆっきーだけじゃなんか心配だしね」
「そんなことといって物語の中心にいたいだけじゃないのかい？」
そうかも——っと美月ちゃんはつなげて
「でもその言い方って中二病ぽいよw」と続けた。もちろん笑顔でね。

二話

人との縁とはそう簡単に作ることができるものではない。他人と友達になるのだって難しいしそれは大人になるにつれ打算的な考えをもってしまう。

逆を言えば大人になってしまえばたいていのことは割り切って他人と付き合うことができるようになるが、大切なものというものが見えてくるからこそ損得勘定で動くことができるのだと思う。

当時の僕は青春中の花の高校生であり子供らしい幻想的で甘ったるい考えと現実的で苦い考えのちょうど真ん中、無償に他人を信じて友といえないが、かと言ってその場限りの付き合いなんてできやしないのだ。

つまり、何が言いたいというと邪気眼系中二病患者である彼女達とどのように仲良くなればいいのか少し悩んでしまう。

ただ話しかけて仲良くなれる保障はないし、当時の僕は自分の話術にそこまで自信を持つことはできなかった。

こうやってぐだぐだと長ったらしく語ってみているが結論から言うと確かめてみようなんていってみたがその方法が思いついていなかったのだ。

「あぁ情けない」

ついつい独り言をいってしまったが、大丈夫だ。問題ない。ここは放課後の図書館でしかも人の少ない日本文学の棚の近く。誰かに聞かれる心配は

「何が情けないのだ坂口後輩」

聞かれてました。はい、変なフラグなんて立てるものじゃないですね。

「なんですか。筋肉先輩こと結城(ゆうき)一真(かずま)先輩。つかこんな人の少ないところに来るのですか先輩なら入り口近くのラノベコーナーで新刊でもチェックしていてくださいな」

僕よりも頭2つ分ほど高い身長で運動部でもないのに物凄い筋肉の持ち主である結城先輩は自分にオタクの道を教えてくれた人でもあると同時に僕の数少ない親友といえる友達だった。
面倒見がいい彼は僕みたにあまり人付き合いが得意ではない人種としてはとてもありがたい人で――なおかつ彼の趣味の賜物である筋肉にはよく助けられていた。
「おいおい坂口後輩。なんだその説明みたいな台詞は。あとすでに新刊なら昼休みにチェック済みだ」
だいたいお前は常に敬語で話しているくせに言葉からは尊敬のその字もみえていないじゃないか。とあきれたようにこめかみを押さえながら
「お前こそこんな人気の少ないところで独り言なんていっているんだ？ついに頭に虫でも沸いたか。哀れだな」
とつなげた結城先輩はそれとなく僕の悩みを聞きだそうとしてきた。
いつもそうなのだ。彼はこうやって言葉巧みにこちらの本心を聞き出そうとしてくる。それは親切心からくるものであることは僕も理解はしているので結城先輩の優しさとして受け取っている。
「沸いてません。まぁ先輩は知らないと思うのですが2年生のなかにですね。高山礼美って子と高津明日香って子がいまして、少し興味があるんです」
「なんだ。高山先輩の妹とその友達がどうしたんだ？面白いことなら俺にも混ぜてもらおうか」
さすがに僕みたいなのと付き合うに慣れている結城先輩は恋愛などといったそっち方面に考えを向けなかったし、むしろ僕のことだからそのようなことがないと断定しているのかもしれない。しかし聞き逃せないことが一つあり
「先輩はご存知なのですか？」
なぜ結城先輩が彼女達のことを知っているのかとそしてその理由を聞いてみた。
「いやさ。お前が入学してくる前に卒業した先輩の1人が高山の兄

なんだよ。俺と同じ科学部の部長をしていた人でさ、最近でもよく遊びにいってるぜ」
「だからその妹とも面識があるし、何度か妹とその友達お前の言う高津さんか――その子とも遊んだことがあるんだよ」
「把握。意外と世界は狭いものですね。まぁそれならば話が早くて助かります。結城先輩から見て二人はどんな人間でしたか？」
少しでも情報はほしいですし、と僕は続けた。
「ただの腐女子だぜ二人とも、まぁ高山先輩の妹とその友達だそっちの趣味がないわけがなく。お前より濃いのは当たり前だな」
本棚に背中から体重を預けるようにもたれかかりながらいつものように上着のポッケに手を突っ込んでいるという体制で先輩は話してくれた。
結城先輩は彼女達が中二病患者であることを知らないらしく、普通の腐女子だ。と言った。腐女子に普通も変もあるものだろうか？なんて質問したかったがそれを聞いていてはオタク歴1年の自分には理解できない世界であることは確かで聞いてしまえば結城先輩のことだからじっくりとお話されそうで怖かった。
さわらぬ神になんとやらだ。
「いやただ彼女達演劇部じゃないですか？自分、演劇とかに興味がありましてその話を聞きたいなぁなんて思っていたりしまして――でも初対面の女の子と話すのって緊張しますしね。どうしようっかなって」
結城先輩の知り合いなら紹介してもらおうと考えとっさに演劇に興味があるなんていい。我ながらいい案を思いついたと内心ほくそ笑んでいた。
しかし世の中僕の考えていることの斜め上をよく行く事が多く。この時もそうであったとそして僕の後悔だらけの高校生活が結城先輩の言葉をきっかけに始まったのだった。
「――――――なら演劇部に入っちゃえよw」

三話

急に入部するとなると僕としても心の準備とかバイトとかの問題があり、まず最初に体験入部をしてみると言うことで結城先輩と話しをした。

翌日の放課後、僕は結城先輩と二人で演劇部の部室に行った。

それなりに緊張していて初対面そうそう彼女達の中二病相手にどのようなリアクションをするべきかな？とそれなりに某大型掲示板からの情報で想像し想定していたが――――考えただけで頭が痛い。

僕の考えでは

「ふはははは――――君が結城三年が連れてきた新入部希望者かね！？しかし、君のためを思って忠告するが演劇部に入部することはあまりお勧めできない。機関に狙われてしまうからな！！」

「あまり私達と親しくしないほうがいいわ！！いいの。誰かに理解されようとは思わないし私は常に孤独に生きていく運命だから……」

なんてくるのでは？と

しかし、普通に考えてみたら初対面の人に心を開いてくれるわけでもなく。いきなり理解不能な世界観をこちらに押し付けてくるということはなかった。

「君が入部希望の坂口君？結城先輩もお久しぶりです。私、演劇部の部長の高山礼美です。よろしくね」

文学少女――――高山さんの容姿はそれそのものだった。

肌は白く細身な体系で胸も残念。げふんげふん。少し長め髪を二つに分け三つ編みになっていた。

おとなしそうな雰囲気をまとっていて赤いフレームのめがねは知的に見えた。

「こちらこそよろしくお願いします。入部希望といいますがただ興味があるだけで部活動に参加できるかといいますとバイトなどがあ

りますからどうなのかなと思いますし、半ば強引に結城先輩に引っ張られてきてしまいましたが見学させていただきます？」
　冗談を交えながらあまり期待を持たせないよう挨拶を交わす。これが僕と高山さんとの初会話でそれはとても普通な感じの会話だった。
「引っ張ってないじゃん。坂口後輩。俺はお前の付き添い兼紹介役として来ているわけで」
「はいはい結城先輩。いいから中に入らせてもらいましょう？ドアの前で話しているのもなんだと思いますし、いいですか？高山さん」
「ええ。どうぞ中に」
　結城先輩とこんなところで漫才するつもりもないので途中で彼の言葉をさえぎり部室の中に入れてもらった。
　今回、この体験入部での僕の目的は
　1、高山さん高津さんにそれなりに好印象を持たせること
　2、話しやすい騙されやすい人だと思わせること
　3、僕、坂口有希に興味を持ってもらうこと
　の三つだ。と言ってもこの三つは常日頃から僕が他人と接するときに気をつけていることであり何かしら特別なことをするわけではない。
　相手に好印象を持たせることや自分に興味を持ってもらうようにすることは誰もがやっていることであり、ただ僕の場合はそこに騙されやすそうな人というのを付け加えているだけだ。
　人は付け入る隙の大きい相手や自分より格下の人間には本性を現しやくなおかつこちらを利用しようとしてくる傾向にある。少なくとも短いが僕の人生の中でであった人はほとんどそうであった。
　そして、僕は小さい損であるならばそれを許容しなるべく自分が危ない目にあわないように生きてきたのだった。
　打算的なつまらない生き方だと思うかもしれないがこれは僕がいつも表面だけで笑っている両親や大好きである祖父の話から学んだことだった。

他人は常に嘘を付いて最大の利益を得ようとしている。そう思えていたからこそ、逆に利用させてあげ僕が利用していこう。
「坂口君は2年だよね。タメだから敬語つかわなくていいよ」
こっちに座ってと僕らを案内しながら高山さんは言ってきた。
確かに同級生から敬語を使われると気になるものだと思うが
「これが僕の普通ですから」と答えるしかない。
「母が厳しい人手でして、昔から敬語を使わされていたのですよ。それが染み付いちゃいまして、どうも直そうとしても無理でしてね」
困ったものだよ。と肩をすくめてみた。
「そなの？まぁ私は嫌じゃないしさ。いいけど」
「そうしてもらうと助かるよ」
結城先輩にとってはよく聞く。僕と初対面の人との会話が終わるのを見計らって
「で明日香ちゃんやもう一人の部員はどこにいるんだい？」と質問した。
演劇部の部室兼練習場であるこの空き教室の中には僕ら3人しかいず。教室の真ん中の席を向かい合わせにして話している状況だった。
「ケミーは今日はお家の用事があるらしくてやすみで、明日香なら吹奏楽部のほうに先に顔出してからこっちにくるそうなのです。そろそろくるともいます」
ケミー？っと気になったが話からしてもう一人の部員の子みたいだ。
高山さんは一人で今まで練習していたのかなどと思ったがこの教室なにには何かしら練習などをしていた形跡はなく。机の上の文庫本とコーヒー牛乳が彼女の今までを物語っていた。
「ｆｍｆｍでは礼美ちゃんは一人で練習？」
結城先輩は気づいていないらしく。一人じゃ大変だねと続けた。
「ええ。でも私部長だし。頑張らないとって思うんです。最近、集まりが悪くて困ってるのですが、それは人数が少なくて本格的な練

習ができないからくるものだと思うんですけど坂口君が入ってくれたらケミーも男一人で気まずい思いもせずにすむと思うし、大変助かるんだけどね」健気さ&真面目アピール乙

「それはえらいな。礼美ちゃんは――――こいつはさ興味とかさ面白いことには目がないやつだからさきっと演劇部に入ると思うｚｅ」

「本当ですか！？すごく助かるーどうかな坂口君は？」

確かに彼女達の今後の行動を観察するには同じ部活に入ってしまうのが手っ取り早い。

同じコミュにいるということは仲間意識も出てくるだろうし放課後といった決まった時間に安定して会うことができるというのはとても効率がいい方法だともう。

しかしだ、僕は役者などには性格的に向いてなく。人前で大きな声などを出すのが苦手なのだ。だが――――演劇って役者だけでは成り立っているものではないはず。

「そうだね。バイトと掛け持ちになってしまうのがかまわないのなら。役者とかはできないけど裏方ぐらいだったら僕や結城先輩でも出来るんじゃないかな？細かい作業は得意だし、結城先輩の筋肉は言うまでもないからね」

この条件なら入っても大丈夫じゃないだろうかと思いながらしれっと結城先輩も一緒に入るみたいに伝える。

「おいおい。俺がいつはいるなって言ったか？まぁ科学部は木曜以外活動してないけどさ。ほら3年だし俺にも――――」

結城先輩が否定しようと理由を言っている途中。教室のドアを開けながら一人の小麦色をした女の子が入ってきた。

背も結城先輩とあまり変わらないくらい高く短く聞いた黒髪が活発そうな印象をこちらに与えてくる。

高山さんに少し分けてあげろよといいたくなるほど胸も大きく。少々目つきが悪いのさえ我慢すれば十分に可愛い子といえると思った。

多分だろうがこの子が高津明日香さんなのだろう。

「ごめ。ちょっと遅れたかな礼美。って結城先輩じゃないですか。チーッス」
「明日香、失礼だよ」
「チーッス。邪魔してるｚｅ」
先輩来てたんですか。ご無沙汰してます。などと結城先輩と会話をしていた高津さんは僕のほうを向いて
「だれこのショタ。何でいるの？」などと失礼なことを言ってきた。確かに僕は背が低いがどっから見ても高校生なわけでそこまで童顔ではない。
「明日香、同級生の坂口君と結城先輩がね入部してくれるんだって」
「え…マジ！？確かにこいつなら女装すればいけるかもしれないな――」
なんて恐ろしいことをいうんですか高津さん！！
「いやね。裏方志望だよ二人とも」
「結城先輩ならともかく坂口は力ないでしょ」
「細かい作業が得意らしいし、今は何でもいいから部員がほしい時期だし、入ってくれるのならありがたいじゃん」
などと高山さんと高津さんは二人して仲よさそうに話をしているが。この状況だけ見たら音に聞く中二病患者には思えなかった。
「なぁ坂口後輩。もしかして俺も入ること前提で話してね？あの二人」
彼女達の付き合いがある結城先輩は何かあきらめた表情で僕に話しかけてきた。
「あはは。僕からはご愁傷様としか言いようがないというか――――あとで事情を話しますので一緒に地獄に行きましょう」
そう僕だけで楽しむのは不公平だろうし、巻き込めるのであるなら多くの人を巻き込んで楽しみたいと思っていた。
多分。当時の僕は一人では不安だっただろうし、きっとこれから起こるイベントでは自分ひとりでは手に負えない物ばかりであったのを知らないうちに感じ取っていたからかもしれない。

四話　（前書き）

遅くなりました。
今回の事件だけは実際にあったことです。
この小説では初ですねw

四話

ゴールデンウィークの夜のことだった。
その日は、演劇部員どうしで友好を深めるという目的でカラオケに言ってきた夜のこと。
夜中のことだった。
高山礼美さんから電話があった。
当然のことだが僕も寝ていた。寝ていたが起きたのだ。起こされた。
「はい。もしもし。坂口です」
起きたばかりなのだ眠いのだ。だからだった。
だから、
「私…汚れちゃった」
その言葉を聞いた時、何も理解できなかった。出来なかったのだ。
「――――――――もうやだ。死にたい」
携帯電話ごしに聞こえてきた声は掠れて荒んでいるようだった。
「今野に犯された」
僕から言葉が出なかった出なかっただけで頭の中では物凄く渦巻いていた。
今野将太。自分より2つ上の結城先輩の先輩。長身でとにかくでかい人だった。そして彼は特徴的なアゴの持ち主。どのようなアゴかというと学園ハンサムっというゲームの色鉛筆船先輩くらいだ。
あまり話したことはないが今日のカラオケにもＯＢとして高山礼美さんのお兄さんと一緒に参加していて率先して場の空気を盛り上げようとしていた。
そんな人に犯された？なぜどうして、今野先輩からして高山さんは親友の妹であり部活の後輩。それ以上の関係であるなどと聞いたこともなかった。
確かにあまりいいうわさを聞いたことがなかったがそれでもうざ

いとか絡んでくるなどといった無害？なもので女の子を無理やり押し倒すなどといった危ない人、なんて事は聞いたことがない。
「結城先輩も今野となかがいいし、明日香に話したらきっとおこって今野に話すだろうし、お兄ちゃんなんて論外で、ほかの友達にもこんなことといえないよぉ。もういや。何もかもがいやなの」
そしてなによりも何で僕に？といった疑問が大きかった。
部活に入って1ヶ月ぐらいしかたっていなく。それなりに友好的にしていたが、急にこのような重い話が出来るような仲ではないはず。
でもだ。これは高山さんから僕が信用されていると考えてもいいのかもしれない。
が、高山さんは僕にどうして欲しいのか？
なぜ？こんな夜中に？
どうして僕を？
信用してるのか？
嘘じゃないだろうか？
メリットは何だ？僕にこの話をして何の徳になる？
わからない。
わからないのなら、僕はどうすればいい？
「あの…グッチ？ごめんね…こんな話して」
だが、この話を信じなかったら高山さんはどうなる？もし本当だとしたら？そして僕から突き放されたら？
話からすると誰にも話せない――らしい。
「死にたいよぉ…」
本当に死ぬかもしれない。そしたらきっと僕は苦しむだろう。
なら信用したらどうなる？何が出来る？助けることが出来るのか？
でも、こっちのほうがいい。信用したことにしておいたほうがいい。
デメリットはこっちのほうが少ない。
なら僕は…

「大丈夫？僕は何をすればいいの？力になれるかな？」
「もうやぁ…無理やりね――――。あのあとお兄ちゃんと遊ぶからって今野が家に泊まりに来ていたの。そしたら夜中に私の部屋に来て、ベットの上に…ぐすん。う上着を脱がされて」
「つらくなると思うから話さなくていいよ。でこれからどうしようようか。まだ家には今野先輩がいるの？」
「……いる。やることやったら、お兄ちゃんの部屋に帰っていった――――。」
「ご両親は？」
「きっと私のことなんて信じてくれないよぉ…だってパパもママも私のこと嫌いだし…」
「でも話してみる価値はあると思うよ。」
「きっとパパから怒られるよぉ」
「どうして？」
「――――――――――――。嘘付くなって。お兄ちゃんの友達がそんなことするわけないって」
「逃げて来い。僕のところでいいなら1日だけでも匿うことができると思うし、まだ、今野先輩と同じ家にいるってのが怖いからね」
「いや。いい。あとで私が怒られるから」
「親に怒られようとどうだろうと自分の体は大切だと思うから。移動費は気にしなくていい。僕が出すからタクシーで今から来なよ。」
「むりだよぉ。家を出ようとしたらばれるよ」
「じゃぁどうしたいの？」
「――――――――――――――――。」
　高山さんは黙り込んだ。長い沈黙だった。
　電話越しに泣き声を押し殺しているような音と携帯にストラップがゆれてあたる音がずっと聞こえてきた。
　気まずい沈黙だ。僕のほうから電話を切ることが出来ないし、向こうからきろうとはしない。
　僕は待った。彼女から何か言葉を発してくれるのを

1時間くらいたっただろうか。長い間聞こえていた泣き声も枯れるようにとまりぼそっと
「…私、死ぬよ」
つぶやいたのだった。
「やめたほうがいいよ。今がつらいだけできっとこの先いいことあるよ。」
「私には何もないよ。きっとこの先もずっとこんなのばっかりで…一生――――――なら死んだほうがいい」
「そんなことはない」
僕は止めようとした。止まってほしかった。
何か、何かを持ち出した音がして、沈黙の中から「痛っ。」と声が聞こえた。
「グッチ。血がいっぱい出てるよ。私の手首から…」
リストカット。
手首を剃刀などで切りつけ自分を痛めつける行為。
美月ちゃんがよくやる。自分を確かめる儀式。
それは、自殺にも使われるものだった。
なんどか美月ちゃんのを直で見たことがある。深く自分の腕を自分で切りつけていく。白い腕からゆっくりと這う真っ赤な血。
見ているこっちも痛くなる。
美月ちゃんの場合は深くだが死なない程度に腕を切りつけていた、高山さんは手首を切ったみたいだった。
息遣いが荒く。そして、最初よりも強く強く押し殺すように泣く。
死にたくないと。死にたいと。
「とにかくすぐにタオルか何かで手首を押さえろ！」
敬語なんて忘れて強い口調で命令する。そう命令だ。
きっと、自分で決めることが出来ないから、今みたいな状況になっているはず。
なら一時的にでも僕が勝手に決めてしまえばいい。
高山さんに必要なのは冷静になる時間だ。自分の命の価値を再確

認するために必要な時間だ。
「おさえたか！？血が止まるまでしっかり抑えろ」
柄にもなく怒鳴る。
「――――うん」
その返事を聞いて僕は安心した。
「そしたら、応急措置は出来る？」
「うん、リスカしたことあるから大丈夫」
「そっか…で、また話は戻るが高山さんはどうしたいの？」
沈黙。だが今回はそんなに長くはなかった。
「わからないけど。自殺はやめてみる」
「そっか。だったら、いまからでも「あああ。パパが来た。私は大丈夫だから、もう死のうなんて考えないようにするから、ありがとグッチ。切るね。おやすみ」
慌てて話を切られる。あんなに長く重かった時間があっさりと終わってしまった。
携帯の通話時間が異様なほどに長かった。４時間２１分――――。
もう、朝が来ていた。

とんだ茶番だった。

途中から気づいたのだ。嘘だと。
リストカット。
僕の知るそれは、痛みで自分を自覚するためだとか。誰かにかまって欲しいなど。
直接、それを死ぬ方法とする人は少ないのではないだろうか？
誰が、死ぬことを長い時間自覚しながら、ゆっくりと冷えていく自分の体を感じながら死にたいと思うだろうか。
だいたいリスカだけで死ぬのは困難だ。腕を切り落としたってそれが死に繋がるわけではない。
血だって固まり、傷は塞がっていく。

切った手首を水につけるぐらいしないと出血死にはならないだろう。
そのことは何度かリスカをしたことがあるといっていた高山さんでに知っているはずだ。
なら彼女はリスカを選んだのか？
死ぬ気がなかったからだ。
なぜ？死にたいといっていたのにその気がなかったのか？
なぜ？僕以外の人に知られるのがいやだったのか？
ならなぜ？嘘を付いたのか？
どこまでが嘘で、どこまでが本当なのかは知らないが。
死ぬ気はなかったはずだ。
少しだけ安心した。
ホッとした。
少なくとも今から自殺なんてしないだろうと思ったからだ。
僕は高山さんの話をすべて嘘だと思った。思いたかった。
だから、確認することにしたんだ。
高山さんに迷惑をかけない方法で…調べていこう。

高山礼美のブログにて

Ｙってホントうわさとおりに超単純だったｗｗｗ
つか私の演技がうますぎなのかもｗ
まぁ劇団で培った演技力は伊達じゃないエへｗｗｗ

まさかこんなにも早くこんなにも単純に結果が出るとは…
美月ちゃんにレイプ事件の話をしたら
「ぜったい嘘だってｗでもユッキー４時間近くも眠らせてもらえなかったってｗｗつか、携帯小説の読みすぎｗあそっだ。これ高山の

ブログのＵＲＳｗあとで何か書き足されているかもｗ」
「いやぁ。それはないでしょｗ僕が見る可能性があるし、そうじゃなくても僕の知り合いがみて教えるかもしれないじゃんｗ」
「ちょｗｗおまｗｗｗのってるよｗつかないわーｗｗｗ」
なんて会話があって
大爆笑しました。
――――――疲れたよ。
これが僕の最初で、そしてこれからも彼女達と僕の戯言が続いていくのだった。

四話　（後書き）

このレイプ事件は長い間相談とかっこつけてつづきました。そのことはまた別の話で。

リアルの自分は本気で騙されました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0540t/

高校生活

2011年5月16日00時55分発行